

毛を抜く少年の内的世界について

生島 博之
(教育実践総合センター)

The Innerworld of The Two Boys Suffering from Trichotillomania

Hiroyuki IKUSHIMA

(Center for Research, Training and Guidance in Educational Practice,
Aichi University of Education)

本論文は、抜毛症の小学生男児2名の遊戯治療の経過を報告したものである。小学校3年生男児Mは、遊戯治療の中で、「女の子を人質にとってハゲにして殺し、最後には自決する銀行強盗」の遊びに熱中し、学校や家庭場面などでは、好きな女の子のあとをつけたり、いたづら電話をかけたりした。小学校4年生男児Yは、箱庭の中で、「流れの悪い川や渋滞する自動車」「ダムに墜落した飛行機」「武術の練習をする兵士」などを表現し、学校や家庭などでは、いたづら電話に熱中したりした。これらのことから、抜毛症の背景として、否定的な自己イメージ、鬱積し内閉された激しい攻撃的感情、いたづら電話に象徴されるようなアクティングアウト傾向と現実感覚の希薄さ、兄弟葛藤、身体境界の不明瞭さ(自他の境界のあいまいさ)等がうかがわれた。

[キーワード] 抜毛症, いたづら電話, いじめられっ子

はじめに

抜毛症とは、身体の毛、特に頭髪を強迫的に抜く症状であり、Hallopeau(1889)の報告が最初で、我が国では土肥(1930)の第1例報告がある。その後、小口(1976)、小片(1978)、杉村・柴台(1988)ほか、多くの研究がなされ、抜毛症児の親子(母子)関係、発症年齢と性差や治癒率との関係、自罰傾向を伴う屈折した攻撃性、等について報告がなされている。

老松(1988)は、抜毛症についてコンパクトな論説を展開し、「従来は女兒に多いとされてきたが、その性差は明らかではない。ただし、概ね、思春期以前は男児に、思春期以後は女兒に、成人では男性に多いようである」等と述べる一方、抜毛症の発症機序や精神病理について概観し以下のごとく8つのポイントをあげている。⁽⁴⁾

- ① 環境的圧迫/主として母親によって抑えつけられた結果、不満から精神的緊張が高まり、これを解消するため抜毛が行われる。
- ② 自慰の代償行為
- ③ 無意識的な両性葛藤/例えば女兒においては、女性になることの拒否、放棄、あるいは、男性化願望。
- ④ 母子関係の阻害から/愛情の対象である母親との情緒関係が阻害された結果、母親の象徴的代用物である頭髪に対して、特殊な関係が無意識的に成立する。
- ⑤ 性的不適応状態/頭髪には男性的強さという象徴的意味が付与されている。性衝動の過度な抑圧

のために性的不適応状態におちいると、それを身体的に表現する抜毛が行われる。

- ⑥ 攻撃-否定-自己懲罰/母親からの情緒的拒否に対して敵意が生じ、この敵意によって、愛情の対象である母親を傷つけてしまうのではないかという不安が生じる。そして、そのような敵意を抱いた自己への懲罰として抜毛が行われる。
- ⑦ 両親との三角関係における敗北/情緒的な関係が失われてしまった母親と一体となろうとして、毛髪をなめ、飲み込む。また、サディスティックな両親の制御不能の怒りを鎮めるために、自罰的行動として毛を抜く。そして、女性であることを拒否することによって、父親を巡る母親との三角関係での敗北を宣言し、かつ、母親が男になった自分を、男としての父親を愛するより以上に愛してくれることを無意識的に願う。
- ⑧ 抜毛共生/母子ともに、分離や自立に対する不安があり、敵意と愛情という矛盾した感情をもっている。父親といえば、恐れられるか、無視されるだけであり、母子関係はいつまでもベタベタしている。

そして、老松は、「年長児にみられる抜毛は、愛情の対象である両親(主として母親)への屈折した攻撃性や不満の身体的表現である」「支配的、独善的な強い性格の母親と、存在感が稀薄で性格的にも弱い父親との間において、過剰な期待や過干渉により常に圧迫を受けていることにより抜毛が生じる」等、述べた上で「髪を掻きむしる」という表現を掘り下げたり、サムソンの神話などを引用することにより、髪は毛が

もっている深層的なイメージについて考察している。

さて、筆者は、2例の抜毛症男児の治療経験を持つ機会を得たので、そのプレイセラピーの経過を、箱庭作品（写真）を挿入しながら報告し、抜毛症児の内的世界についてほりさげてみることにしたい。

事例1 小学校3年生男児 M

(1) 主訴 頭の毛を抜く、爪かみ、友達とうまく遊べない、

(2) 家族構成

実父（36才）新聞専業員、実母（33才）パート、M（8:6）、妹（2才）、の4人家族。

実父は、内気で人の前に出るのが嫌いな人。結婚後「もっとお金がいる」とのことで現在の仕事を始めたが、一時期、家から外に出られなかったことがある。釣りが好きで、仙人のような生活にあこがれており、時間があれば一人で遊びに出るため、子どもと遊ぶ時間がない。Mと同じく、毛を抜く癖と爪かみがある。2号の子で、母親の死後、本家に引き取られるが本妻に折檻されたらしく大きなヤイトの跡が残っている。

実母は、身だしなみに無頓着な人で、面接中に平気でオッパイを出してMの妹に授乳する。Mに対しては口やかましく躰をしてきたとのことである。中学を卒業すると、母親が離婚して経済的に苦しかったため、半強制的に集団就職される。（父親は離婚を繰り返す、現在は4人目の妻と暮らしている。4人の妻たちは知り合いどうしとのことである）

妹は、おせっかいやきな子で、Mよりも口が達者。

(3) 生育史および問題歴

Mの実母は、集団交際で知り合ったおとなしい男性（Mの実父）と結婚し、1年後にMを自然分娩で出産する。そして、Mは、特に病気もなく順調に育つ。だが、言葉が少ないため、母親は児童相談所に相談に行く。Mは、初対面の人（テスター等）と人間関係がうまくいかず、知能テストは実施できなかったが、「特殊学級に入ってはどうか」と勧められる。2年保育に通うが、友達の間をうかがったり等のいたづらが多く、きつくやり返されても平気で仲間に入っていた。

小学校に入学後は、いじめられるようになり、成績は中の下であったが、休むことなく登校する。乗り物が好きで、遠くの駅までひとりで往復できた。小3になり、毛を抜くことが目立ちはじめ、頭上部に10cmぐらいのハゲができるようになる。そのため、友達から「ハゲがうつる」と避けられたりするようになり、心配した母親に連れられて来所し、週1回のプレイセラピーを受けることになる。

(4) プレイセラピーの経過（治療期間：2年8ヶ月）
第1期（第1～11回）“ハゲにされた人質の女の子”

Mは、丸坊主スタイルで来所するが、母子分離不安

を示し、緊張した表情でプレイルームに入室し、しばらく立ちすくんだりし、蚊の鳴くような声で、「お母さんとこ行ってもいい」と聞いたり、「あと何分？」と何回も聞く。後頭部には、野球場のような形の大きなハゲがみられるし、衣服からは悪臭がにっているが、どちらも気にならない様子である。（丸坊主は、「毛を全部刈った方が、早く生えてくるから」という母親の考えによるらしい）

慣れてくるにつれて遊びですが、遊びに関係なく、「エベレストと富士山と、どっちが高い？」「新幹線と快速と、どっちが速い？」「静岡と岡山とどっちが速い？」「ピストルとナイフとどっちが怖い？」「ヘビとコブラと、どっちが強い？」等と、質問することが多い。（Mは、富士山は3776mと正確に知っており、わざとセラピストに回答させようとする等、自分なりの答えをもって質問している感じである）

遊びは、怪獣遊びや銀行強盗ごっこが中心である。サメが、ガバッと怪獣やウルトラマンを呑み込もうとするとところから闘いが始まるが、ウルトラマンは首をちぎられてしまい、助けにきた親ウルトラマンもやられてしまい、ツノとキバのでた怪獣のみが一番強く生き残る。

次には、Mは、ピストルに興味を示し、タマをつめると不意にセラピストを撃ち、「ぼく、梅川（銀行強盗）する」と言う。そこで、セラピストは警官役となり、自動車に乗って逃げるMを追いかけたりする。

すると、Mは、「口を開けろ！」と命じて、警官の口めがけて弾丸を撃ちこもうとしたりし、射殺して喜んだりする。だが、応援にかけつけた警官たちに取り囲まれると、Mは、大きな積木で砦をつくり、女の子（人形）を人質にとってその中に立てこもる。そして爆弾（ミニ果実）を投げて応戦したり、人質の女の子の髪の毛を切ってハゲにして喜ぶ。そこで、警官（セラピスト）が、「そんな可哀想なことしたらお嫁にいけないからやめなさい！ そんなことしたらお前こそハゲにするぞ！」と説得するが、効き目がない。そこで、銀行強盗の両親を呼びよせ、息子の説得をつづけるが、Mは、「お母さんは弱いから嫌い。盗むから嫌い」「お父さんも嫌い」と言い、父母も射殺してしまう。そして、人質の女の子も全員殺してしまう。（女の子のパンツの上からナイフで刺して殺し、「包丁とキリとどっちがよく刺さる？」と聞いたりする）

そのため、警官は強行突破して逮捕に向かうことにするが、Mは、自分の胸にピストルをあてて自殺したり、刀を腹にあてて切腹したりする。（このような遊びが連想させたのか、Mは、祖父母がガス漏れにより死亡したことを述べたりする）

第2期（第12～29回）“もうプレイしない！”

この時期の特徴は、銀行強盗が人質の女の子を殺すという遊びがかけをひそめ、身体を使っての遊びが増

え、セラピストに攻撃的感情をぶつけるようになったこと、そして、ハゲが7割ほど回復したことである。

(また、母親に來客があるため、単独で來所するようになり自信を持ちだす。だが、その反面、口を開けるチック症状がみられだしたりもする)

Mは、ドッチボール、野球、フットベースボール等を好んでするようになるが、自信欠如のため、不明瞭なルールで遊び、自分が勝つように試合を運ぶ一方、わざとデットボールしたり、セラピストの顔を狙って投げ、「怖いやろ」と言ったりする。

だが、Mは、徐々に実力もつけ始め、シーソーゲームを演じることが出来るようになる。しかし、勝ちたい気持ちも高まってきているため、空振りを「振ってない」と言ったり、セラピストのヒットを「ファールや」と主張したりし、ズルをしてでも勝とうとする。

そして、セラピストにズルを指摘されたり、「正直インジャンで決めよう」と妥協案を提案されると、激しく抵抗し、「生島先生はズルイ!」「もう帰る!」「もうプレイに來たらへん!」と、激怒したりする。

(だが、その反面、「ぼくの家に遊びに來て」と言ったりもする)

第3期(第30～38回) “アデランス投手”

この時期の特徴は、野球遊びや銀行強盗ごっこをする中で、自分のハゲを意識化しだしたこと等である。そして、現実にはハゲがまた増加し、Mは帽子をかぶったままプレイしたりするようになる。

野球遊び等の身体を使う遊びでは、ルールを守って落ち着いて遊ぶことが増加する。そして、タマを拾おうとしてかがんだ時に、「見たらあかんぞ」と言う。

(万一かぶっている帽子がとれてハゲをみられることを気にしているらしい)

そして、試合が白熱してきて追いつかれると、床につばを吐き、工作用のノコギリをみつけて、「切ったるか!」と怒ったり、ゾウリを投げつけたり、「殺してやる!」と、バットで殴りかかったりする。そしてセラピストに制止されると、涙をポロポロ流したりする。(また、「先生はぼくの説明を少しも聞いてくれない」と文句を言い、脱走しようとしたりもする)

だが、落ち着いてくると、「ぼくが間違っていた」と言い、試合を続行して逆転しだすと、「大丈夫ですよ、アデランス」とCMを連発する。そこで、セラピストが、「アデランス投手、投げました。打たれました!」等と冷やかしたりするが、気にせず続投する。そして、試合が勝利に終わると、「この前の日曜日、お父さんとタワーを見に行った」と嬉しそうに報告したりする。(また、無賃乗車して車掌に見つかりお金を払わされたことを自分から報告したりもする)

銀行強盗ごっこでは、Mは、女の人形を持って立てこもり、人質を次々と殺す。そこで、セラピストは、息子を説得する親を演じ、「ハゲがあるからといって

ひがんで強盗なんかしないで! アデランス買ってあげるから自首して」等と懇願したりする。しかし、Mは、「うるさい、死ね!」と言い、説得を無視して鉄砲で撃ってくる。だが、銀行強盗ごっこが最後になると、セラピストの予想に反して、Mは、突然、陣地から目に涙を浮かべて飛び出してきた、「お母さ〜ん!」と両手をひろげてセラピスト(母親)に抱きついてくる。そして、Mは、「お母さんにお金をあげようと思って銀行強盗したのや。ごめん。もうしません!」と訴える。(また、ある場面では、いつものように自決した銀行強盗のMに対して、セラピストが救急車に乗ってかけつけ、「ハゲの手術をしよう。悪い皮をはごう」と言い、Mの頭をなでるが、Mは目をつむっておとなしく手術を受ける)

*この時期に、母親から「Mは最近、友達と元気に遊べるようになってきた」との喜びの電話があった。

第4期(第39～54回) “ハゲなおった”

この時期の特徴は、プラレール遊びが中心となり、落ち着いて遊ぶようになったこと、そして、ハゲがなおってきたことを喜ぶようになったこと、さっぱりした表情がみられるようになったこと等である。

Mは、プラレールに興味をもちだし、技術的には下手であるが、自分なりに工夫して線路を完成させ、列車を競争させたりしながら、「特急はどこで急行を抜くの?」と質問したりする。また、「最近、仲良しになった友達とよく遊んでいる」と述べたり、くみとり式トイレの話を熱心にしたりする。

その後、プラレールづくりに慣れてくると、Mは、特急と急行の2台を走らせ、時間待ち調整の遊びに熱中し、床の上に寝ころびながらリラックスして遊んだり、女性的な優しい声で、停車駅や乗り替えのアナウンスを上手にしたり、時刻表をつくらしたりする。そして、持参してきた電車の本と切符と写真をセラピストに見せ、「この切符、駅員さんにもらった」「この特急の写真は〇〇駅でとったのや」等と嬉しそうに報告したりする。また、ホームコタツにはいつている父親の写真を見せて、「お父さんは毎日、晩酌している」「お父さんは、都はるみが好きなのや」等と説明したりする。

プラレール遊びのほかには、野球と泥棒ごっこ(かくれんぼ)をする。野球では、ルールを守って遊ぶことが増え、自分から審判役をかってでて正しい判定をくだしたりもするようになる。そして、「子どものアデランスあるの? アデランス投手です」等と言いながら投球したりする。そして、うまくアウトにとると帽子を手にとってガッツポーズをし、「ほら、毛が生えてきたやろ」「マッサージしてるから治ってきた」等と言い、頭を見せたりする。また、散髪してきた時には、「かっこいいやろ」と言い、青びかりした頭を見せたりする。(また、Mは、別の回では、「ぼくは

何も悪いことしてないのに、友達が『ハゲ!』と言っていじめるのや。ハゲを気にしているのに」と涙を浮かべて訴えたりもする)

泥棒ごっこでは、Mは、以前の銀行強盗遊び(女の子を人質にしてたてこもる遊び)がかげをひそめ、Mは警官となってパトカーに乗り、泥棒のセラピストを追跡し、格闘(相撲)したりする。また、逆に、Mは泥棒となり、逃げてかくれんぼしたりする。(この頃母親より「最近Mが私の財布からお金を持ち出した」との報告があったので、この事についてたずねると、Mは、あっさりと認め、「電車に乗りたくて盗んだ」と説明する)そして、タイムアップになると、「寒いから気つけや」と優しい言葉をかけて退室し、別れぎわに、「先生、ぼく好きか?」と聞いたりする)

第5期(第55~66回)“「ぼくは地獄いきか?」”

この時期の特徴は、小学校5年生になったMが、さらに元気になってきたのはいいが、女の子への関心を持ち出し不適切な行動をとったため、話し合ったりしたこと等である。

Mは、野球あそびを楽しみ、リードされても徐々に追いついて逆転できるようになり、「ぼく、粘り強いやろ。あーしんどかった」と述べたりする。そして、「ハゲはあと3ヶ月ほどで治ると思う。毛を抜かないようにしているのや」「散髪屋さんで薬を塗ってもらったから治ると思う」「治らなくても妹がいる(妹と結婚する)からいいのや」と言ったり、「学校の小運動会でリレーで走って上位に入賞した」「放送部に入ってアナウンスしている。小6になったらもうプレイは終わるつもり」と述べたりする。だが、タイムアップになると、魔がさしたのかボールを服の中に入れて退室しようとし、発見されると素直に返したりする。

その後、母親から「Mは、ある女の子が好きらしくて、下校の際に、その女の子のあとをつけて歩いたりした。また、その女の子の家に電話して、女の子が出ると電話を切ってしまうため、親が気持ち悪がっている」と、心配と怒りの電話がかかってくる。そこでセラピストは、野球などしながら、この事についてMに話しかけると、「好きやからあとをつけていったのや。でも、いざとなると恥ずかしくて声かけられなかった……諦めんとあかんかな」と、本音を述べる一方、「このことでお父さんに叱られた」とも言う。

また、Mは、以前に母親の財布からお金を盗んだことを自分から思い出し、「ぼくは地獄いきか?」「地獄ってどんどこ?」と質問したり、「ぼくのお祖母さんとお祖父さんはもう天国に行った。天国は空より高いの?」「電車の運転手さんが事故をおこしたら刑務所へ行くの?」と言ったりする。

第6期(第67~83回)“「終わるのさみしいな」”

この時期の特徴は、Mのハゲもほとんど目立たなくなり、セラピストとの距離も適度なものとなり、寂し

い気持ちをいだきながらも終結をうけ入れたこと等である。

Mは、野球あそびやゲーム遊び等をするが、遊び方はノーマルな印象が増加してき、セラピストとの距離の持ち方も普通感じになってくる。(第3期頃のMは、母親のトイレの中までついていく幼児のようにセラピストの後をつきまどったりしていた)そして、「先週はクラブ(ソフトボール部)があってここへ来るの忘れてた」と説明したり、逆に、友達と一緒に連れて来たりするようになる。そこで、終結について話し合うと同意し、「あと4回でおわりやな。少し寂しいな」と言いながら、最終回をむかえる。

[フォローアップ]

中学1年生になったMは、「今日は試験の最終日で早く終わったから」と、ひょっこり2回おとずれる。そして、「先生、白毛いっぱいあるな。何才?」「結婚してるの?子どもいるの?どこに住んでるの?」等と聞いたりして、懐かしがる。近況をたづねられると、「陸上部に入っている。この前の試合では、上級生と一緒に走り3位に入った。区民マラソン大会では上位に入賞した」「親友の親戚の家(静岡)まで、二人で旅行した」等と応答する。ハゲはみあたらない。

卒業式前には、「お母さんがお礼の挨拶にうかがいたいと言っている」と予約し、母子で来所する。Mは「卒業したら左官になって働くことになっている」等と、明るい表情で報告する。

事例2 小学校4年生男児 Y

(1) 主訴 頭の毛を抜く、集団生活不応、ひとり言をよく言う、肥満、

(2) 家族構成

実父(44才)自営業、実母(38才)主婦、長兄(15才)高校1年生、次兄(14才)中学3年生、Y(10:0)、の4人家族。

実父は、外向的な性格で、人がよい印象を与える。

実母は、いつも笑顔のきさくな女性で、Yにも愛情をかけている。深刻に考え込むタイプではない。

長兄は、Yと仲がよくない。

次兄は、学力も優秀でYをよく可愛がっている。

(3) 生育史および問題歴

Yは、幼児期、言葉がでるのが遅く、人の問いかけに反応が乏しかったり、ミニカーばかりで遊んだりしており、「自閉的傾向がみられる」と指摘されたことがある。また、極端に多動で、危険な所へサッと飛び出したりするため、目はなせなかった。そして、言葉が出てからは、ひとり言が多く、自傷行為もみられた様子である。就学前から太り出し、現在では、中度の肥満となり、病院の肥満相談に通っており、食事制限をしている。そのためストレスがたまるのか、隠れ

て物を食べたり、兄の食物を盗って食べたり、家族の財布を盗ったりするようになる。

また、小学校3年生の1月頃、毛髪乾燥器をかぶって頭の頂上がチリチリになったことがあり、それ以後はひまにまかせて髪の毛を抜くようになる。そのため母親は、Yを丸坊主にしたが、少し生えてくると抜くため、3ヶ所ほどハゲができてしまう。そして、友達からハゲをからかわれていじめられたり、クラスやクラブ活動で周囲の子とうまくいかなかったりするのが目立つようになり、先生の話に上の空であったりして学力も劣っているため、心配した母親に連れられて来所し、週1回のプレイセラピーを受けることになる。

(4)プレイセラピーの経過(治療期間:4年10ヶ月)
第1期(第1~10回) “ダムと流れの悪い川”

Yは帽子をかぶったまま野球や本将棋などをして遊ぶ。だが、野球のルールを理解はもうひとつで、技術的にも下手であり、右足と右腕を同時にあげて投球しようとして苦労したり、バットを持つ手の上下が逆になっていたりする。利き手もまだ決まっていない様子である。また、打って走る時には、左回りに走ったりする。肥満気味でスタミナがなく汗をかいているので「暑かったら帽子ぬいだら」とすすめると、「いい」と言い恥ずかしがる。

本将棋では、「ぼく5段や。おじちゃんに教えてもらったのや」と言い、意気込んでやり出すが、攻めにばかり気をつかい完敗してしまったりする。その他のゲーム遊び(トランプなど)では、自信がないため、ズルをして勝とうとすることが多い。



箱庭(第10回)

そして、Yは、この時期に4つの箱庭(第1回、第2回、第8回、第10回)をつくる。そのテーマは、「町の真中に川が流れたり、自動車が走っている」といったものが多い。Yは、箱庭を3つの領域に分ける感じで作ることが多く、まず、上と下の各3分の一の領域に家並みを置く。そして、真中に、ダムから流れる川や、両端がトンネルになっている道路をつくり自動車を走らせる。だが、川は停滞している感じでうまく流れておらず、自動車は一方向にだけ走っていて

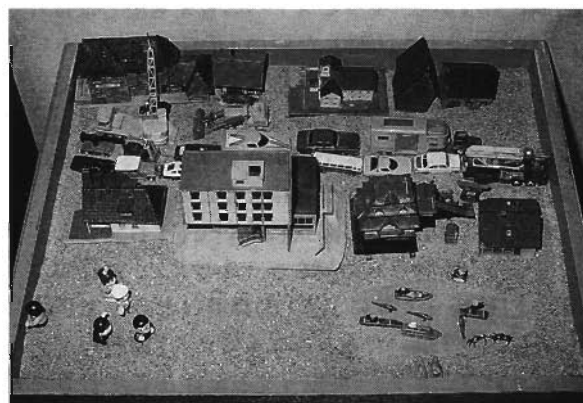
追突事故がおこっていたりしている。また、町の中では、工事中で通行止になったりしてところもあり、エネルギーがうまく流れていないのが特徴である。(また、Yは、金色の五重塔の上にミニ怪獣を置き、「怪獣が壊しているところ」と説明したりもする)

第2期(第11~25回) “ダムに墜落した飛行機”

この時期の特徴は、ハゲがなくなったこと、ゲーム遊びが中心となるが、自信欠如のためズルを多くして勝とうとしたこと、等である。

Yは、帽子を脱いで遊ぶようになり、毛はフサフサになる。野球盤ゲーム、魚釣りゲーム、双六ゲーム、ひよこまわり、等をするが、技術的に下手なため、セラピストがあきれる程ズルを連発し勝って喜ぶ。魚釣りゲームでは、魚が回転するためなかなか釣れず、手でサオの先をもって魚の口に入れて釣るといった具合であり、野球盤ゲームでは2~3回で勝ち逃げし、9回終了まで試合をすることはしない。だが、一方では、ダンボールを利用して完成させたゴルフ場を持参してきて、「昨夜おそくまでかかって作ったのや」と言う等、集中力もうかがわせ、満足気に遊んだりもする。

箱庭は3回つくる。第16回には、町並みの真中に渋滞した自動車を右方向にのみ走らせ、左上に家を工事しているクレーン車を置く。そして、左下にダムをつくり、「ダムに飛行機が墜落した」と言い、見物にきた人々を置く。しかし、すぐに飛行機とダムは取りのぞき、右下に池を作って木の船を浮かべる。



箱庭(第16回)

第23回には、オバケのQ太郎たちがヘビと野牛にはさみ撃ちにあっているところをつくる。第25回には町並みと右方向に走る自動車をつくった後、右端にマリア像とキリスト像を建てる。そして、空いているところに飛行機と滑り台を置く。その後、左上にサクで囲ってゾウと野牛を入れて戦わせ、それを見ている男の子を置く。(写真は、作品を左方向から見たもの)

*Yに同行した母親は、「Yは兄と野球盤をよくするが、ズルをするのですぐ喧嘩になる。ここではズルはしていませんか?」と質問する。父親は、「肥満気味なので、Yにラグビーをさせている」と報告する。



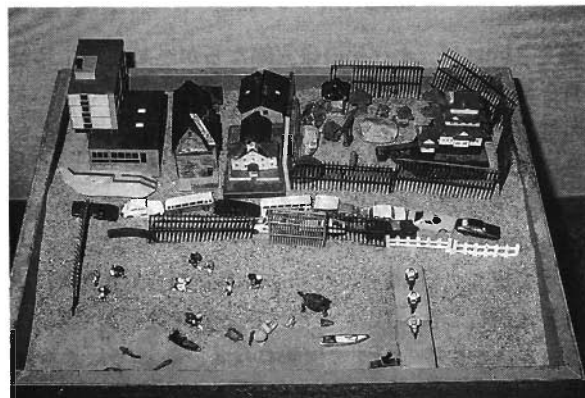
箱庭 (第25回)

第3期 (第26～44回) “土手で野球する子ども達”

この時期の特徴は、Yが小5になり、ゲーム遊びでズルが減少し、負けても自分の敗北を認めることが出来るようになったこと、父方祖母の死に影響されてか色々と考えだしたこと、等である。

遊びはゲームと野球が主となる。スーパーマリオゲーム、双六、サッカーゲーム、野球盤ゲーム、等を好んでするが、これまでのようにズルをすることがなくなり、負けても、自分の敗北を認めることが出来るようになる。野球では、セラピストに投球させ、Yは2チーム分の打撃を引き受け、自分が勝たせたいチームの勝利に終わらせて満足する一方、汗をかいて走り回ることにより減量につとめ出す。そして、このような遊びをしながら、セラピストへの甘えも出しはじめ、「生島先生は家庭訪問しないの」「日記交換したい」等と言ったりする。また、学校での様子について自発的に話しだし、「平泳ぎで100メートル泳げた」「放送部に入った。運動会でアナウンスをする」「運動会では100メートル走で5人中3番だった」等と言う。

また、父方祖母のお葬式について、「お父さんが泣いていた」と報告したのをきっかけに、「お経ってなに?」「幽霊ってなに?」「火葬場はどうして遠くにしかないの?焼いたらどうなるの?」「縁起が悪いってどういうこと?」「地獄ってどんどこ?」等と質問したりする。



箱庭 (第27回)

箱庭は2回つくる。第27回には、上半分に町並みをつくるが、これまでと違い2つの領域に明確に分け柵で囲ってその中に城や神社(聖なる領域)を置く。中央には、交互に自動車を走らせる。そして、下半分には川をつくって橋をかけ、オートバイに乗った3人の男を橋の上に置く。土手には、野球をする子ども達を置く。第38回には、左半分だけをつかい、城や金色の五重塔をコの字型に置き、その真中にお墓を3つ置き、「僕とお兄ちゃん達のお墓」と言う。

第4期 (第45～57回) “いじめるのは楽しい”

この時期の特徴は、Yが学校場面でトラブルを生じたこと(親担当からの情報)から、野球やゲーム遊びしながら、この事について話し合ったことである。

Yは、クラスメイトとのトラブルについて、少しづつながらも嬉しそうに話す。女の子の笛がなくなって疑われている件については、「女の子の机の中から出てきた。僕は隠してない」と言う。男の子とのトラブルについては、「友達が『おぼえとけよ!』と言っていきなり階段から突いたため、転んでカッとになり、その友達の首を締めて『3分間がまんせよ!』と言ってやった。以前、その友達に『2分間がまんせよ!』と言われて首を締められた」「友達数人に馬のりにされて、カッとになって、『殺してやる!』と言ってキリをもった」等と述べる。だが、その後は、このような大きなトラブルが減ったのか、「いじめあっこしている」「友達から『ブク、デブ!』とからかわれて腹が立つので、ワラ人形つくって見せつけてクギを刺すまねをしている」「弱い子の背中におぶさっていじめたりする。いじめるのはおもしろい」等と言うようになる。そして、学校のマラソンでがんばったことを報告したり、「通信簿は、オール『頑張りましょう!』や」と言ったりする。

第5期 (第58～80回) “電話魔になったY”

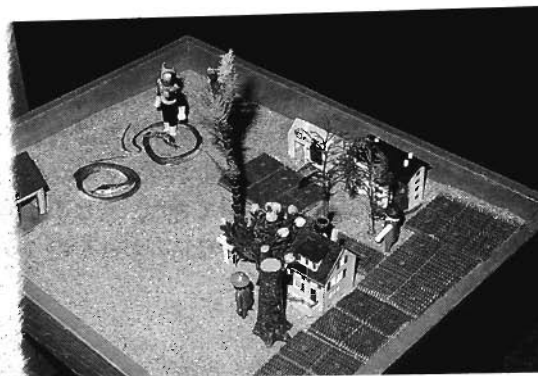
小6になったYは、背が伸び少しスマートな体型になり、「生島先生は何才ですか?教えてください」等と丁寧な喋り方をするようになったり、チック様の咳払いをしながら、野球や電話ごっこ等を楽しむ。

野球では、技術的にも上達してき、「Yチーム 対生島チーム」等の試合とし、「4番 Y, 5番 A(友達の名前) 6番 B(家庭教師の名前)」等と打順を決め、一人で2チーム分の打撃を引き受け、セラピストに投球させて打って走る。そのうち、持参したテープを鳴らしながら試合をするが、その内容は、友達と吹き込んだ替え歌(ウルトラマンのメロディーで「オナニーマン♪」等)であり、大喜びする。ルーレットでは、「賭けてたら、大人になって病つきになったら怖い」と言い、10円ばかり賭けて遊ぶ。

電話遊びでは、セラピストに電話をかけてくるが、「ババア、死ぬ! アハハ」「お前の家は呪われている」と言って切ってしまう。そして、Yは、実際にい

たづら電話をかけていることについて、「クラスでいたづら電話がはやっているのや」「他人の名前でかけて、『パンツ何色?』『セックスしたい』とか言うのや」「カッとなるといたづら電話してしまう」等と説明した後、「セックスで何?」「警察にかけたらばれてしまって叱られた。なんでやろ?」等と、真顔で質問したりする。(兄たちとの替え歌づくりやいたづら電話は、もうひとつ意味がわからずしており、雰囲気のみ楽しんでいる印象をあたえる)

箱庭は2回つくる。第72回には、左半分には、城などを置いて柵で囲って陣地をつくり兵隊を置き、右半分のふつうの町並みから敵の兵隊が攻めてくるのに備える。第74回には、陸で武術の練習をする兵士(右)、船つき場で敵に備える船長(左)を置く。



箱庭 (第121回)



箱庭 (第74回)

第6期(第81~123回) “「喧嘩して勝った」”

中学校1年生になったYは、自分の問題に少しずつ目を向けるようになり、セラピストとも少し距離もちはじめようになる。

Yは、プラモデル遊びで金閣寺や七重塔を造りながら、「最近、減量しているのや」と自分から報告したり、「クラブは柔道部に入った方がいいですか。野球部からも誘われている」「警官になるにはどうしたらいいですか」等と質問したりする。また、日本の歴史(まんが)を読みながら、2・26事件や極東裁判についてふれ、「自害って何?」「毒殺って何?」と質問したりする。そして、プラモデルの金閣寺や七重塔が完成すると、それをつかって箱庭で城下町をつくる(第85回) なお、この時期には、あと2回箱庭をつくる。第114回には、ウルトラマンと怪獣の戦い、第121回には、最初はヤリを持って戦っていた2人の少年が、その後は合体して仮面ライダーになり、2匹のヘビをやっつけるところをつくる。

また、この時期には、Yは、時々いじめられたり、家族と喧嘩したり、いたづら電話を又かかってしまったこと等を話しながら自分で乗り越えていけるようになる。いじめについては、ひさしぶりに友達にかかわられて、自分の教科書をビリビリにやぶったこと、それ

を母親に叱られて包丁をふりまわしたことや、小学校の時のいじめっ子に「のろくさ!お前の顔を見ると腹が立つ」と言われていじめられること等を述べ、「強くなりたい」と訴える。そして、ホワイトボードに、「十字架の上にくくりつけられた男の子」や、「ナイフで女の子を人質にする男」の絵を描き、「〇〇死刑台」と名づけ、鉄砲で撃って喜ぶ。(〇〇はいじめっ子の名前である) その後、Yは、少林寺拳法を習いに行ったこともあり、徐々に自信をもち始め、「友達が『西武が優勝したらフルチンで運動場を走れ』と命じたが断った。喧嘩になったが勝った。別に先生は怒らなかった」と報告するようになる。また、長兄にからかわれて、父親のゴルフ棒を振り回して植木鉢を割ったこと、名前をおちょくってからかう父親に物を投げつけたこと等を報告し、「お父さんたちとの喧嘩はもう終わった」と言う。また、ひさしぶりのいたづら電話については、「友達に宿題をきこうと思ってかけたが留守番電話になっていたので、腹が立って、『アホ、バカ』と言ってきいた」「(好きな)美術の先生に電話したが、数学の先生ができたので、『アホ、ボケ』と言ってきいた」等と理由を説明し、「もう、いたづら電話はしてない」と言う。

第7期(第124~150回) “将来を考え出すY”

中2になったYは、たまにいじめられることもあったが、特に混乱することもなく、学力も少しは向上しだし、「高校は水産科か農芸科に行きたい」と述べるようになるなど、将来のことを考えだすようになる。

遊びは、野球盤ゲームが主で、ルールを守ってシーズンゲームを演じ楽しんでする。身体を使う遊びとしては、卓球や野球をするが技術的に上達してくる。野球では、以前のように2チーム分(打撃のみ)するのではなく、セラピストをキャッチャーにして投球練習を続け上達するようになる。

いじめについては、小学校4年生の時の同級生に、「ガイシャ」(障害者の意味)「死んでしまえ!」と言われたり、胸につけているバッチをちぎられたりしたが、短期間で解消したとのことである。(どうやら

好きな女の子をめぐるのトラブルらしい)

3月には、一浪していた次兄が国立大学に合格したことをYは喜び、「(針灸の学校の受験に失敗した)長男は美容院で働いている」と述べたりする。

*母親は、「次兄は、合格祝いと称して友達とストリップを見に行き、『お母さんと似た人がでていた!』と、興奮して公衆電話からかけてきた。変な子ばかり3人で困りますわ」と苦笑し、終結のお礼を述べる。

考 察

さて、これまでのところで述べた抜毛症の小学校中学年の男児2名のプレイセラピーの経過をもとに、両児童に共通する特徴をとりあげることにより、抜毛症のメカニズム等について考察することにしよう。

まず、自己イメージの悪さとカインコンプレックスについて考えてみることにしよう。Mは、銀行強盗ごっこで、人質の女の子(人形)の髪の毛を切ってハゲにして喜び、警察(セラピスト)に追いかけられる遊び(かくれんぼ)を繰り返している。また、Mは、実際に母親の財布からお金を盗んだり無賃乗車したりしたことに関して、「ぼくは地獄いきか?」「天国は空より高い?」等と質問している。一方、Yは、ゲーム遊びの中で、ルールの理解力が未発達なこともあるが、負けることを恐れズルばかりして勝とうとしているし、「ナイフで女の子を人質にする男」を鉄砲で撃って喜んでいる。また、Yは、父方祖母のお葬式に刺激されたのか、「地獄ってどんなところ?」「幽霊って何?」等と質問しているし、母親の報告にあるように長兄との仲の悪さがうかがわれる。

だが、遊戯治療が進むにつれてMとYは、ゲーム遊びや野球遊び等で自信を持ちだすなど、自己イメージが肯定的に変化してきており、「大丈夫ですよ、アデランス」とMは口ずさむようになり、Yは、箱庭で、「オートバイののって橋を渡る3人の男」「武術の練習をする兵士」「2匹のヘビと戦う2人の少年」を置くなど変化をみせている。

また、同胞葛藤の改善もうかがわれ、Mは、「ハゲが治らなくても妹がいるからいいのや」等と親愛の気持ちるを述べるようになり、Yは、箱庭で「僕とお兄ちゃん達のお墓」を作ったのを転換点とし、兄達と吹き込んだ替え歌(エッチな歌)に大喜びしている。

次に、欲求(衝動)をコントロールする力の弱さ等について考えてみることにしよう。二人に共通するのは、女の子へのいたづら電話などに象徴されるように、内から沸きあがってくる欲求に対する健全な判断力の欠如であり、この点は、友達関係における不適応(いじめられ、カッとなること)にも関連していると思われる。そして、これを乗り越えようとして、「どっちが強い?」「セックスって何?」「自害って何? 毒殺

って何?」等と、一見すると質問癖とみられる発言を繰り返していたと思われるし、Mの「時間まち調整」(プラレール)の遊びやYの箱庭の流れ(ダムに墜落した飛行機、流れの悪い川、渋滞した自動車などの改善)もこの線上にある。(また、抜毛が減少するとチック症状が出現しているのも興味深い)そして実生活においては、Mは無賃乗車で車掌に叱られ、Yは、いじめっ子との対決などを通して鍛えられていったと思われる。(Yの「〇〇死刑台」の遊びも興味深い)

さて、最後に抜毛症のメカニズムについて考察してみよう。まず、あげられるのは、鬱積した攻撃的感情の存在と自我境界の不明瞭さ、等である。そして、その原因としては、幼少期に母親との間に暖かい関係がきづけなかったこと、希薄な父子関係、同胞葛藤、などが推測される。それ故、抜毛は、行き場のない攻撃性を自分に向ける行為(自傷行為)であると同時に、「自分が抜いているのか他者に抜かれているのか分からない」という混然とした状態-自分と外界-を分化し、ボディイメージを明確化する行為といった二面性を持っていると思われる。だが、Mが、「お母さんにお金をあげようと思って銀行強盗したのや」と述べているように、抜毛は、親への必死のアピールでもあると思われる。つまり、このような醜い自分の姿をさらすことにより、愛してくれなかった親たちへの憤りを表出すると同時に、毛のまだ生えていない赤ん坊をいとおしむ母親たちがするように、「頭をなでなでして欲しい」と強く訴えていると思われるのである。ある抜毛症男児(小3)は、セラピストの頭の上にヘビやワニをのせて鏡で見ようとして求めたが、また別の回にはキリストと便器をのせたのであった。このようにアンビバレントな物が同時に頭にひっついていているというイメージが、抜毛症児がいただいている親たちへのメッセージを象徴的に表していると思われるのである。(このような観点からながめると、Yが箱庭の中でキリストとマリアの像を置いていることや、Mがくみとり式トイレに興味をもっていたことも興味深い)

[引用・参考文献]

- (1)藤沢敏幸(1976): 抜毛症の症例報告(その1) 広島心理療法研究, 1(2), 1-6.
- (2)Hallopeau, M. (1889): Alopecia par grattage 10 Ann. de Dermat. Syph. 440.
- (3)小口 徹はら(1976): Tichotillomaniaの精神医学的研究. 精神医学, 18, 47-49.
- (4)老松克博(1988): 抜毛症 山中康裕編, 子どもの心身症 東山書店, 171-189.
- (5)杉村省吾・柴台哲夫(1988): 抜毛癖を主訴とする症児の母親カウンセリング 武庫川女子大学幼児教育研究紀要, 7, 7-67.